

異版 日本永代蔵考

中洲 佐由美

はじめに

西鶴晩年の作である日本永代蔵に、多くの異版があることは、周知の通りである。本稿では、主として異版の挿絵・版下・出刊順序等を、書誌学的観点から検討し、当時の出版事情、及び彫版技術について一考察を試みんとするものである。

一

異版日本永代蔵の挿絵に、三都版系の挿絵が利用されていることについては、次の如き諸説がある。

一、瀧田貞治「西鶴襟裏」(六六頁)

原版の大きさを縮小されたから自然天地或は左右を削り乍ら努めて原画の趣を出そうとし、一見その相違點に気付かぬ程であるが、版下は彫り替えたもの。

二、吉田幸一「異版日本永代蔵」(古典文庫)解説(二頁)

大本(上方版)の繪を半紙本に入れ得るだけ天地左右の餘

分を削除してあるに過ぎない。

三、「西鶴」天理図書館(二二九頁)

挿絵利用の方法の一は一種のかぶせ彫りともいふべく、畫面の主要なる部分は出来るだけかぶせ彫りにして、もとの構圖のまゝとし、さして必要を認めぬものは切捨て、縮小された匡郭内に納まるやうにして、新しく版をおこしたものが多し。この中でも原畫そのままのもの、人物や草木その他を省略したもの、若干變形させたもの、様々原畫中の材料を取合せて新構圖をつくるものと種々である。利用方法の二は、匡郭の縮小に應じて、圖柄は同じながら縮圖する方法である。これにも省略・變形・取合せが行なはれてゐる。

四、野間光辰「西鶴集 下」(日本古典文学体系)(一〇頁)

森田板の上辺を少し縮めただけのものである。

右の諸説をまとめると

- (1) 原版の上辺のみ縮めたもの。
- (2) 原版の天地左右の余分を削除したもの。

異版日本永代蔵考

(3) 縮小された匡郭に納まるようにして、かぶせ彫りをしたものである。

(イ) 原画そのままのもの。

(ロ) 人物や草木その他を省略したもの、若干変形したものの。

(ハ) 様々、原画中の材料を取合せて新構図を作るもの。

(4) 匡郭の縮小に応じて図柄は同じながら縮図したもの。

(イ) 省略 (ロ) 変形 (ハ) 取合せ

即ち、挿絵利用の方法には四種あることがわかるが、異版の挿絵版下が、どのようにして作成されたか、現状では、なお明らかではない。従つて本稿では、主として異版挿絵の覆刻方法を中心に考察を進めて行きたい。

かぶせ彫りに使用される版下について(注 1)従来諸説は、(1)原版本をそのまま貼用して版下とするもの。(2)原刻本の臨模によるものを版下とするもの。(3)原刻本の透写によるものを版下とするもの。以上三種の方法があるが、異版永代蔵は、原刻本の図柄を忠実に再現するため、透写の方法をとりながらも、版下の移動によつて、部分的に省略・変形・縮図している。この特徴を顕著に示すものとして、原版系・巻四(いせえびの高買)第十九丁表・異版系(無刊記本・巻二、第十三丁表)の暈の縁。原刻系・巻五(まはりとをきハとけい細工)第三丁裏、無刊記本・巻四、第三丁裏の舟の柱。又原版系・巻二(天ぐハいへなかさくるま)第十六丁

表、無刊記本・巻六・第十一丁表の鉦が、原刻本の定位置のままの不自然な図柄で彫られている現象がみられる。これは、原刻本の定位置より異版の図柄の位置に版下を移動した際、誤つて定位置のままの図柄を写したために生じたものであろう。

次に原刻本を透写する場合、具体的には、如何なる方法がとられたのであろうか。調査にあつては、薄い紙を異版の上にあてて人物・草木・山等の輪郭を透写し、それを原刻本の上に重ね、人物・草木・山等の省略、変形、移動を見る方法をとつた。

一、先ず、原刻本を敷き写す版本は、異版の匡郭のみが書かれたものを使用し、見開きの図柄の接続を無視した不自然な図柄のみられるところから、版下は、半丁単位で使用されたものであろう。(例、原版系・巻六、第十六丁裏、第十七丁表。異版系(無刊記本・巻一、第十一丁裏、第十二丁表。))
二、透写の方法として

異版の挿絵(半紙本)は、原刻本(大本)の匡郭より、概ね縦二・三種、横一・六種縮小された大きさであるが、原刻本の挿絵を縮小するには、

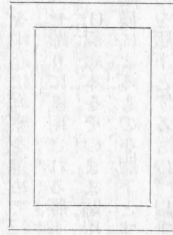
(イ) 異版版下を原刻本の図柄のある一定の位置に固定する方法。

(ロ) 異版の縮小にともなつて、版下を移動させながら人物等を適当にまとめる方法。

の二方法をみる事ができる。(イ)を固定型、(ロ)を移動型と呼ぶことにする。(以下、これに従う。)

(イ) 固定型(永代蔵全挿絵三十のうち十七図)

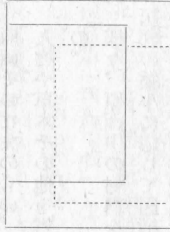
(1) 原刻本の匡郭の中央に置いたもの。つまり四周の余分が一樣であるもの。但し上、下、右、左辺の余分の長さは、一定しない。



(10 図) (注2)

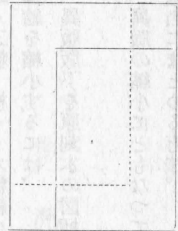
(2) 四周のいづれか一辺に合せたもの。例えば、原、覆刻

本の左辺の匡郭に合せると、余分は上、右、下辺にみられるもの。



(16 図)

(3) 四周の二辺に合せたもの。つまり、余分が二辺のもの。



(2 図)

(ロ) 移動型(挿絵三十のうち十三図)

(1) 原刻本の匡郭を利用する方法。先ず原画の右匡郭と版下の右匡郭を合せて、その周辺の図柄の一部を写しとり、次に左匡郭に合せてその周辺の図柄をとる。

(2) 原刻本の匡郭を無視して、個々の図柄を版下の適当な位置に移動させて写しとる方法。

三、固定型・移動型の全挿絵を通してみられる図柄の一利用方法について。

縮小された異版の匡郭内で、図柄のバランスをとるため、特に人物に於て縮図する方法がとられている。この縮図は、人物を中心にして、先ず上半身のみを写しとり、そのまま一耗から四耗、原本から版木を下方にずらして、下半身を写しとつたものである。従つて、この縮小は、縦にみられ、横には、その変化がみられない。尚、この方法で、すべての人物を縮図したのではなく、そのまま写しとるもの、即ち原寸大の人物もあり、人物利用の方法は、たゞ人物の縦の寸法を短かくしたに過ぎず、人物全体を縮小したものではないものと、原寸大のものとの二種が混合して利用されて

異版日本永代蔵考

いる。

(イ) 全面、人物が原寸大であるもの。(原版系・巻一、第八丁裏、無刊記本・巻一、第五丁表。)

(ロ) 全面、人物を縮図したもの。(原版系・巻二、第十九丁裏、第二十丁表。無刊記本・巻四、第九丁裏、第十丁表。)

(ハ) 原寸大と縮図された人物が混合しているもの。(原版系・巻一、第四丁裏、五丁表。無刊記本・巻三、第二丁裏、三丁表。)である。尚、前記移動型に於て、原刻本の定位置より移動した人物は、原版系・巻一、第四丁裏、無刊記本・巻三、第二丁裏を除いて、他は原寸大である。

このほかぶせ彫りには、原版と異版を詳細に検討すると、省略・変形が細部にみられる。原版を正確に模刻することがそれ程の意味もたず、又多少手をぬいても左程に目立たぬ箇所には、省略、変形がなされている。これらの諸現象を挙げる。

(イ) 槍雲内の線の相違が甚だしいこと。(原版系・巻六、第十丁裏、十一丁表。異版系・無刊記本・巻二、第十丁裏、十二丁表)

(ロ) 人物の顔の表情に相違がみられること。これは全体にわたつてみられ、彫工の彫工技術の問題ともなるが、目・眉・鼻・口等、その彫り方は、かなり粗雑であ

り、表情は、原版のそれに比して生気が感じられない。つまり異版は細部まで原版に忠実に彫られていない。

(ハ) 細部な箇所には彫り残しの見られること。故意によるものか、彫り忘れたか判明出来ないが、当然彫らねばならぬ箇所が黒のままに彫り残されている。白の方が手数の掛けることは言うまでもない。このような箇所は、まみ見受けるところである。

以上、異版永代蔵の挿絵利用の方法は、先ず匡郭のみを書いた半丁分の版下を原刻本の挿絵の上に重ね合せ、そのまま動かさずに図柄を透写する方法と、匡郭内に収まるように適宜、版下を移動しながら透写する二種の方法が使用され、全体の図柄は、そのままにして、特に人物のみを縮図する部分的な縮図の方法も、全体を通じて頻繁に行なわれているのである。以上縮図、縮小の語を使用してきたが、異版日本永代蔵挿絵について、この語は大本から半紙本匡郭内に組み込むために、上、下、左、右を切り取り、又は、匡郭周辺の図柄を写し取り、その一部を省略して組み合せ、人物は、胴の部分を一々耗、短縮し、上、下半身を合せて縦の寸法を短縮する方法がとられ、所謂全体を縮小したと言う意味ではない。これも変形ではあるが、一種のかぶせ彫りとしてよいであろう。原刻本の構図と一見、その相違に気付かぬように、巧妙

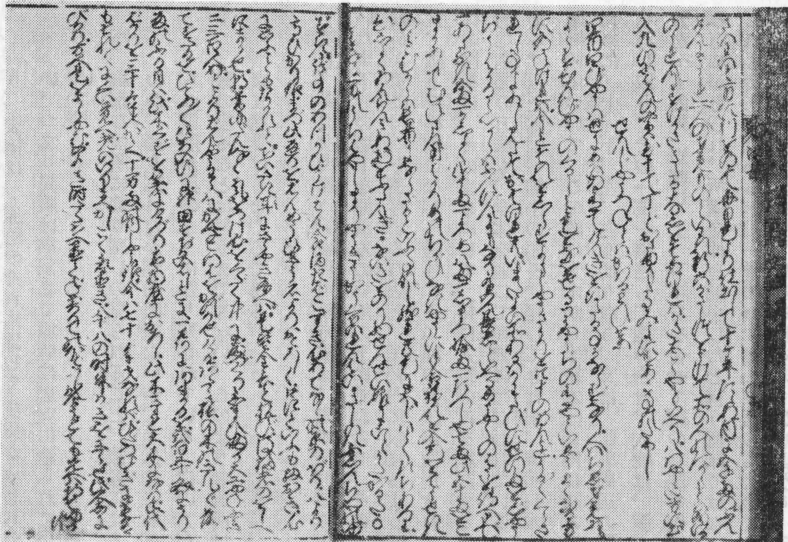
に組み入れられているのである。

二

『異版永代蔵、無刊記本と柏原屋本について』『無刊記本と柏原屋本との相違は、次の通りである。』

刊記	なし	無刊記本	柏原屋本
製本	大本	半紙本	
巻序(柱刻)	京長、大長、江長 西長、東長、近長	江長、西長、東長 近長、京長	書林、大坂心齋橋筋 柏原屋佐兵衛

両者は同版でありながら「せんじやうつねとハかハるとひ葉」、無刊記本の一章は、巻三・第十二丁裏、半丁のみで、そのまま、裏表紙の白紙になっているのである。柏原屋本では、巻一・第十二丁裏、十三丁表があり、見開きの形で収められている。(写真参照) 柏原屋本の版面を仔細に検討すると、第十三丁表は、同章の第十二丁裏、及び異版全丁とは書風、匡郭等に次の如き相違が見られる。



異版日本永代蔵考

一、第十三丁表の書体は、他の丁とは全く異なる。この調査は、第十三丁表と他丁との文字を集字し、比較する方法によつた。顕著にその相違が見られるのは、心・ハ・に・き・の等であり、同一の版下筆耕によつて同時に書かれた版下であつたならば、書風は、同筆でなければならぬ筈であるが、右の結果からは、第十三丁表と他丁との版下が同一でないことを意味するものと思われる。

二、第十三丁表の匡郭は、他丁と比較していたみが甚しい。匡郭にこのようなひどい欠けが見られるのは、異版全丁を通じてこの丁のみである。これは、第十三丁表のみ版木が、異質であると考えられ、第十三丁表と他の丁とは同時に彫られたものではないことを示していると思われる。

三、第十二丁裏の文章の削除・改変は、他の章にみられる程度の異同であるが、第十三丁表の削除・改変は殊に著しいものがある。

以上のことから柏原屋本の見開きの左半丁は、右半丁及び他の章とは、版下の手が全く相違すると考えるのである。では、何故、このような二種の異版が発行されるに至つたか。先ずその前に、共に刊年の記載のない無刊記本と柏原屋本の出刊順序について再考する必要があると思われる。

これには

(一) 柏原屋本を先とするもの

- (1) 西沢本 (2) 柏原屋本 (3) 無刊記本

野間光辰「西鶴集下」

吉田幸一「異版日本永代蔵」

瀧田貞治「西鶴権祖」

暉峻康隆「定本西鶴全集」(第七巻)

(二) 無刊記本を先とするもの

- (1) 西沢本 (2) 無刊記本 (3) 柏原屋本

天理図書館「西鶴」

の二説があり、私は、次の諸現象により(二)の説、即ち柏原屋本より無刊記本が先に刊行されたものと思われる。

一、無刊記本の匡郭が柏原屋本のそれに比べて大きいこと。これは、後刷りの縮小と言う現象により無刊記本が先に刷られたものと思われる。(注3)

二、柏原屋本に比べて無刊記本の版面が良好であること。

三、無刊記本の巻一のみ、巻末に刊記を入れるだけの余白があること。これは「京、大坂、江戸、西國、東國、近國」の順位を削つて、柏原屋本では、巻一の「京長」に刊記を入木し、これを最後にもつてきたものと思われ、空所の巻一に巻三を移し、巻二をそのままにして、順次巻三の空所に、巻四を、巻四には巻五を繰り上げてゐる。版面の巻二を除く巻一、三、四、五、六の数字は、入木されたものと見られる。

四、柏原屋本の巻序は「江戸、大坂、西國、東國、近國、京都」の順となつてゐるが、西沢本(京長)を巻一において無刊記本の「京、大坂、江戸、西國、東國、近國」の順の方

が自然で常識的な順であること。

右の結果により無刊記本が柏原屋本より先に刊行されたものと思われる。前述したように無刊記本が第十二丁裏で終り、欠丁とみられるのは、版木の汚損、粉失、磨滅か、或いは、原文のままを忠実に刻すると尚一丁余りの長さが必要になるところから丁数節減のため意識的に省略して刊行したものであるかは、尚一考を要するが、柏原屋本に於て大幅に改変して版下筆耕に書き直させたものと思われる。柏原屋本は、原文のまま忠実に刻することは、なし得なかつたにしても、第十三丁表を補つて新たに仕立てなおしたものである。柏原屋本の刊行の理由を、ここに見るのである。「せんじやうつねとハかハるとひ葉」の一章は、従来より論究されているところであるが、柏原屋本に於てのみ文章の改竄・切除の甚しい跡がみられるのであり、この一章のみで無刊記本をも含む異版日本永代蔵の文章を論じることが、性急な解釈となり得るのではないかと思うのである。

以上、版面の検討より得た結果、無刊記本が先に刊行され、その後続く柏原屋本の刊行は、無刊記本の不完全な一章を補つて再刊行するに充分意味のあるものと思われる。

(注1) 木村三四吾「西鶴織留諸版考」(ビブリア・二十八号・八二頁)

その覆刻に使用された方法は、われわれの常識とは違つ

て、原書をそのまま版下に貼用するのではなく、原書を謄写したものを版下としたということが考えられる。むしろこうした方法が当時の常道であつたとすれば、原書と覆刻との間には単に彫刻による誤差だけではなく、謄写による変形・歪曲といった要素も当然計算に入れなければならぬ。

(注2) (一)括弧内は、固定型に属する28丁からその方式に所属した数を表わす。

(注3) 同「西鶴織留諸版考」(八十一頁)

終わりに、本調査に当り、貴重な本を、長期間にわたり閲覧を許し下さつた天理図書館を始め、大阪市立博物館、東洋文庫に対して、深甚の謝意を表します。尚、本稿は、卒業論文を抜すいしたものであります。